



2013 年 7 月 14 日	モーツァルトあれこれ談義	講 師 陣：佐藤、三田
AAFC		写真撮影提供：倉田 勲
分科会資料		資料出展：いろいろ辞典他

モーツァルト いろいろ 事典 松田 聡

ケツヘル番号

【「ケツヘル番号」は 「ケツヘル目録」から生まれた

たとえば、交響曲第40番ト短調 K.550のように人気のあるモーツァルト作品ともなると、550という「ケツヘル（ケツヒェルとも）番号」を覚えていらっしゃる方もおられるでしょう。そこまでいかなくても、多くのクラシック・ファンの方が、550の前についているK.（ドイツではKVとも表記されます）を、ごく自然に「ケツヘル」と読まれているはずです。

モーツァルトの作品番号としてここまで一般化しているケツヘル番号とは、19世紀にオーストリアの学者ケツヘルが作成した「W. A. モーツァルト

の全音楽作品の年代順・主題付き目録」（1862年）で各作品に付けられている番号のことです。ケツヘルは、モーツァルトの作品と判断した全626曲につき、作曲年代順に整理して通し番号をふったのでした。ちなみに、K.1は5歳の作品と考えられていた《ピアノのためのメヌエットとトリオ》、最後のK.626は作曲者の死によって未完に終わったレクイエムです。

この「ケツヘル目録」は、楽曲冒頭の譜例、自筆譜の所有者、出版譜のリストなど、各作品に関する基本的な情報も記されており、西洋音楽史のなかで、学問的にしっかりした最初作品目録として位置づけられます。



【W. A. モーツァルトの全音楽作品の年代順・主題付き目録】初版の扉
1862年、ライプツィヒで発行された。
（海老澤敏氏蔵）

ケツヘル番号÷25+10=?



ケツヘル番号÷25+10という式をご存じだろうか。アメリカの音楽学者ニール・ザスローが『モーツァルト全作品事典』で紹介した、モーツァルトが作曲した年齢を割り出す計算式（小数点以下は切り捨て）で、たしかに交響曲第40番のK.550で試すと、ちょうど32歳になる！

あくまでケツヘルが推定した作曲年齢だが、10歳（1766年）以降の595曲を調べたところ、約半数の297曲がこれに当てはまり、残りもすべて1年の誤差。簡単な式にしてはかなりの精度といえよう。年平均二十数曲というモーツァルトの作曲のペースが、ここからうかがえる。



【目録を作ったケッヘルは、 どのような人？】

それまで植物学や鉱物学の専門家として半生を過ごしてきたケッヘルが、モーツァルトの作品目録の作成に着手したのは1851年、50歳を過ぎてのことでした。

モーツァルト没後60年を迎えたこの年に、敬愛する作曲家の作品の多くが調査もなされず、世に知られないままになっているという現状を知ります。そこで彼は、私財を投じて研究に

取り組み、専門分野でつちかってきた資料の分類・整理の才能を発揮して、およそ10年の歳月をかけて目録を完成させたのです。

ケッヘルは、また、目録の出版の十数年後に準備が始まった『モーツァルト作品全集』（いわゆる「旧全集」）のために多額の寄付を行ない、企画の実現に大きく貢献しました。その刊行が始まったのが1877年のこと、まさにその年に彼は77年の生涯を閉じたのでした。

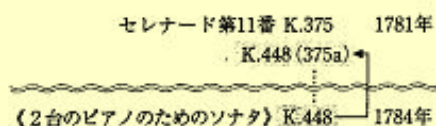


ルートヴィヒ・リッター・フォン・ケッヘル
(1800～77年) 法学博士であり、科学者でもあった。また、皇帝の弟の子供たちの家庭教師を務めたこともあり、貴族に敬せられた。

【アルファベット付き ケッヘル番号の意味は？】

「ケッヘル目録」も、その後の研究によって、不正確な点が明らかとなりました。そのため、20世紀に2回、第3版(K³とも書かれます。1937年刊)と第6版(K⁶とも書かれます。1964年刊)が出される際に大きく改訂されています。その結果、初版に記載された626曲中、実に45パーセントを超える287曲に新たな番号が付けられることとなりました。ただし、初版の番号そのものは動かさず、新番号はアルファベット

付きの数字で表されています。たとえば、《2台のピアノのためのソナタ》K.448は、作曲年代が1784年から81年に修正され、セレナード第11番K.375の次の曲として、新たに(376ではなく)375aという番号が与えられました。なお、新番号は、K.448(375a)というように、初版の番号の後



ケッヘル番号の変更例

にカッコに入れて示するのが普通です。

第6版が出されてから現在にいたる約50年の間、新たに正確な作曲年代が判明した作品も少なからずあります。新番号が必ずしも正確なわけではないことには注意しなくてはなりません。とはいえ、ケッヘル番号のおかげでモーツァルトの作品についての共通認識が容易にできるので、とくに初版の番号は150年近くも親しまれてきています。モーツァルトの作品をケッヘル番号付きで呼ぶという習慣は、今後も残り続けていくことでしょう。



モーツァルト名盤大全

室内楽曲

モーツァルトは18世紀の作曲家として異例と言えるほどに、作曲年代を確定できる資料が豊富だったため、ケツヘルはジャンル別ではなく、成立年代順に作品を並べる方法を採用している。構成は626番までの本編の他、「付録 Anna 8」として疑作、未完の作品、消失作品などの情報を付け加えている。また、彼は全作品を23のジャンルに区分しており、これは「旧モーツァルト全集」に継承されている。

目録を作って作品を管理することは、子供時代のモーツァルト作品に対して父親のレオポルトが、モーツァルト自身もウィーン時代に入ってから行なっていた。モーツァルトの死後は、出版社のアンドレやブライトコプフ・ウント・ヘルテル、研究家のアロイス・フックスなどが目録を作成している。そのような蓄積の上で、銘物学者であったルートヴィヒ・フォン・ケツヘルが「ヴォルフガング・アマデー・モーツァルト全作品年代順主題目録」の初版を出版したのは1862年であった。

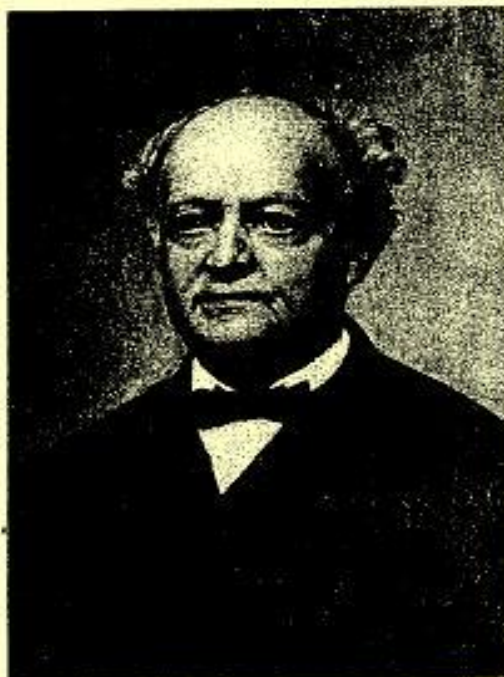
初版は1862年

■安田和信

はみ出しガイド ケツヘル目録について

大きな改訂が施された 改訂第3版

19世紀後半から20世紀初頭にかけて「旧モーツァルト全集」の編纂を中心とした研究の進展により、ケツヘルの目録は改訂される必要が出てきた。それがパウ・フォン・ヴァルターゼー伯爵によるケツヘル目録の改訂第2版（1905年）である。この改訂第2版は、新たに発見された作品の追加や、偽作と判定された作品の削除が行なわれたが、初版の順番をいじることはほとんどなかった。大きな改訂が施されたのは、アルフレート・アインシュタインによる改訂第3版（1937年、修正と補遺を追加した第3版の再版は1946年）である。この改訂第3版では、二重番号制を全面的に取り入れている。たとえば、初版では



ルートヴィヒ・ケツヘル（ケツヘル）
Ludwig Köchel 1800~1877

「182」の番号を与えられた交響曲第25番長調は、新たな研究を受けたアインシュタインの改訂によって「166c」となった。ドイツエルティメント変ロ長調K166と（三位一体の祝日のミサ）K167の間に位置づけるべき作品とされたからである。また、断片や消失作品はもちろんで、初版で疑作とされた作品の一部も真作と断定して本編の中に組み込むなど、付録部分も全面的に改訂した。これによって、とりわけモーツァルト自身が目録をつけ始める1784年以前の作品には、初版と第3版の2種の番号をもつものが出てきたのである。

重ねられてきた 複雑怪奇な改訂

次の改訂版は、フランツ・ギークリング、アレクサンダー・ヴァインマン、ゲルト・ジーヴァースによる改訂第6版（1964年）である。この版はアインシュタインの方式を受け継ぎながら、訂正の必要な作品に新しい番号を付加することも厭わなかった。先述の交響曲第26番は、改訂第6版において「173dA」なる番号をもつこととなった。この曲のケツヘル番号を正式に書くならば、「K182（K166c、K173dA）」という、何ともややこしい事態とならざるを得ない。改訂第6版では付録の部が全面改訂され、全体をAからFまでの6つの部門に分けられた。作品の同定にとって重要なのは最初の3つ、「A」他人の作品のモーツァルト自筆による筆写譜、「B」他人によるモーツァルト作品の編曲、「C」疑・偽作」である。とりわけ付録Cは内部でジャンル分類を表わす数字と個別作品を表わす数字で表記している。たとえば、ヴァイオリン協奏曲第7番変ホ長調は「K268」であるが、改訂第6版では「C・疑・偽作」に回された。この作品は第14作品群「一つまたはそれ以上の独奏楽器のための協奏曲」に分類できるため、「KAnhC14.04」なる番号が与えられたのである。

以上のような経緯で1世紀半近くの間、ケツヘル番号は複雑怪奇な改訂を重ねられてきた。現行の番号もこの30年程の研究の激しい進展を反映しておらず、成立年代順の目録としては機能不全に陥っている。ニール・ザスラウなどによる「新ケツヘル目録」の刊行が待望される所以である。

以上

[目次に戻る](#)